

お客様の声 (H28. 4月~6月)

北海道・女性
弘前出身の作家が何人もいて驚きました。石坂洋次郎の作品も沢山展示されており、素晴らしいと思いました。

つがる市・女性
常設展は何度拝見しても見ごたえがありますが、今回の企画展「福士幸次郎展」「与謝野寛・晶子の津軽」は、感動致しました。

東京・男性
久々に詩の世界にひたれました。方言のひびきは、その地で暮らし、生を受けた人々のさげびとなって心を人間にしてくれます。寄ってよかった。

宮城・男性
郷土出身から関係者まで作家・文学者が非常にコンパクトにまとめて展示しており、鑑賞しやすかった。方言詩コーナーは、大変ユニークな試みであり、よかった。特別企画展も見ごたえがあった。

弘前・女性
大学の時日本語専攻でしたので、教科書の中でこれらの作家の名前と作品名はよく聞いていましたが、郷土文学の中身と魅力はあまりわかりませんでした。弘前に来たあとなんとなくこし理解しつつあります。貴館はもし今後はいくつかの有名な作品の篇章の朗読会(演者と聴者)を行うなら良いのではないのでしょうか。作品を見る以外、聞く面で作家の良さを感じます。

北海道・女性
さくら祭りの通り道に、何も考えずに入りました。正直「福士幸次郎展」ときいてもどちら様でしょうか？と思っていました。入り口にあって詩を読んでビックリしてしまいました。口語自由詩の先がけのかただったのですね。こちらにはたくさんの有名な作家さんがおられた事も初めて知りました。弘前はすごい。今後、少しずつ学んでいこうかと思いました。

企画研究専門官 新任あいさつ

時空を超える「旅」

企画研究専門官 櫛引 洋一

2年前、高知県桂浜の龍馬記念館を訪れ、司馬遼太郎の文章「坂本龍馬 銅像還暦によせて」と出会った。桂浜を訪れた人々が抱くであろう感慨を的確な言葉で表現し、私たちの心をさらなる高みへと導く文章に心惹かれた。

この地が空間として美しいだけでなく、風景そのものがあなたの精神をことごとく象徴しています。

大きく弓なりに白い線を描く桂浜の砂は、あなたの清らかさをあらわしています。この岬は、地球の骨でできあがっているのですが、あなたの動かざる志をあらわしています。さらに絶え間なく岸うづつ波の音は、すぐれた音楽のように律動的だったあなたの精神の調べを物語るかのようです。そしてよくいわれるように、大きくひらかれた水平線は、あなたのかぎりない大きさを、私どもに教えてくれているのです。

「遠くを見よ」

あなたの生涯は、無言に、私どもに、そのことを教えてくれました。いまもそのことを論ずるがように、あなたは森びわたる水のかなたと、雲の色をながめているのです。(略)

一つの建物にすぎない記念館が、桂浜の壮大な風景と司馬遼太郎の見事な文章により、時代と空間を超えたスケールの大きなものへと変貌を遂げていた……。

この4月、前任の館田勝弘先生から企画研究専門官の仕事を引き継いだ。26年前、市制百年を記念して創設された郷土文学館。その設立や運営に尽力して来られた「先達」の方々の「ありし日」に思いを馳せて、身が引き締まる思いである。藩校稽古館・名門東奥義塾があったこの地は、前方は秀峰岩木山を背景に堂々と構える弘前城趾公園に臨み、後方は名匠堀江佐吉の手になる旧市立図書館や、東奥義塾外人宣教師館などの洋館へと連なり、見事な「里程標」たちが時空を超える「旅」へと向かわせる素晴らしい環境にある。かけがえのない貴重な「資料の収集・保存」という文学館の基礎・基本を第一義とし、龍馬記念館における司馬遼太郎の文章に相当する「魂を震わせるもの」を見出し、あるいは創り出していくことに力を注ぐ所存である。

北の文脈ニュース第76号 発行:平成28年8月1日 編集/発行:弘前市立郷土文学館
〒036-8356 青森県弘前市下白銀町 2-1 TEL0172-37-5505 <http://hi-it.net/~bungaku/>

北の文脈ニュース 第76号

Kitano bunmyaku news

第40回企画展「福士幸次郎展」記念講演会

福士幸次郎の詩 北の憂鬱と情熱

講師：藤田 晴央 氏 (詩人)

第40回企画展「福士幸次郎展」記念講演会が8月20日、市立弘前図書館視聴覚室で開催されました。

講師の藤田晴央氏は、1951年に弘前に生まれ詩人として活躍されています。詩誌『歷程』同人、詩誌『弘前詩塾』主宰。東北女子大学非常勤講師、日本文藝家協会会員。中央詩壇のH氏賞選考委員(2005年)、現代詩人賞選考委員(2013年)を務められ、御自身も2014年、詩集『夕顔』で第9回「三好達治賞」を受賞されています。



資料の写真を交えながら講演する藤田氏

口語自由詩の先駆者と言われている福士幸次郎ですが、当時はあまり評価されていなかった中で、詩集『太陽の子』(大正3年洛陽堂)は萩原朔太郎、室生犀星に大きな影響を与え、朔太郎の『『太陽の子』の暗示なしに、僕の『月に吠える』は無かっただろう』はあまりにも有名です。また犀星は『太陽の子』を北原白秋の『邪宗門』以来の快挙と誉めています。今では当たり前に使われている「~のように」を最初に有効に使ったのは福士幸次郎だという朔太郎の指摘や、メトニミー(換喩)の技法を用いた作品も含め、幸次郎の詩の先駆性や卓越性をお話しくいただきました。藤田先生は、未熟かも知れないが、幸次郎の初期の作品に詩の原質があり、朔太郎はそこに感銘を受けたのだろうと話されました。



福士幸次郎

エピソードとして、「私は幸次郎の孫弟子にあたると言えない事もない」と藤田先生。先生が20代の頃、東奥日報の十枚小説コンクールで入選(1978年5月3日掲載)した時の選者が、直木賞作家今官一。東奥義塾の国語教師をしていた幸次郎を師と仰ぐ今官一が、自分の書いたものの良さを認めてくれたのだから、やはり私にとっての「師」でもありましようと言っていました。

福士幸次郎は20~29才までの10年間に詩人としての生涯を燃やし尽くした。初・中・後期と作風が変わっていく中でも、固有のリズムと魂の声の二点を合わせ持っている事は変わる事はなく、その詩を貫いているものは憂鬱から情熱までいかに若者らしい感性。髭を生やした腕組みをした壮年のオジサンではない、憂鬱と情熱にのた打ち回った一人の若い詩人なのだ結びました。穏やかな口調で解かりやすく話してくださいました。

講演会に足を運んでくださったみなさま、ありがとうございました。

サトウハチローの人生を決めた福士幸次郎



サトウハチロー(左)と幸次郎(右)
谷中の下宿屋臥龍館にて(大正7年)

今官一、一戸謙三、高木恭造など福士幸次郎から影響を受けて活躍した作家は多い。

幸次郎との出会いにより詩人の道を歩んだサトウハチローは、「十五歳の十月から十六歳の三月まで」の間、ともに生活した。大正六年、四ヶ月間移り住んだ小笠原・父島では、幸次郎が持ちこんだアンデルセン童話、与謝野晶子の歌集などたくさんの本を読み、歌や詩の勉強をした。また幸次郎がハチローのために見つけてきた島の子供達とは親友となり心通わせ、島に移り住んで二か月後「詩みたいなのを、ノートに書くように」になったという。

随筆集『落第坊主』には当時のエピソードと、幸次郎を「先生」と深く慕う思いが綴られている。

福士先生こそ、ボクが、ほんとうに心から、先生と呼ぶ最初の先生だった。福士先生は名を幸次郎という。ボクのおやじのところへ食客としていた詩人だ。十五歳で、手に負えなくなったボクをおやじとおふくろは、感化院に入れる決心をした。おやじが、ボクにそれを宣告した晩、福士先生は、

「それなら、わたしが、あずかります。」

と申し出たのだ。そして、ボクが先生にいいよ手に負えなければ、感化院にぶちこむというキメにして、小笠原の父島へと行ったのだ。ボク達の住んでいる大村の海辺に立って、向うに防風林が見える。防風林の中に、昼間は白い壁が見え、夜は、かすかに呼吸しているようにともる赤いランプが見えた。そこが感化院なのだ。ボクが、わなくなったと先生が感じたら、カヌーへのせて、そこへ送り込むというのだ。いかなるボクと言えども、これでは少しおとなしくせざるを得ない。

ボクの人生をきめたのは、福士先生だ。ボクを詩人にしたのも福士先生だ、ボクにユーモア小説を書かせたのも福士先生だ。ボクを善導してくれたのも福士先生だ。貧乏を屁とも思わなくさせてくれたのも福士先生だ。借金取りを微笑させてかえす術を体得させたのも福士先生だ。

(サトウハチロー『落第坊主』より)

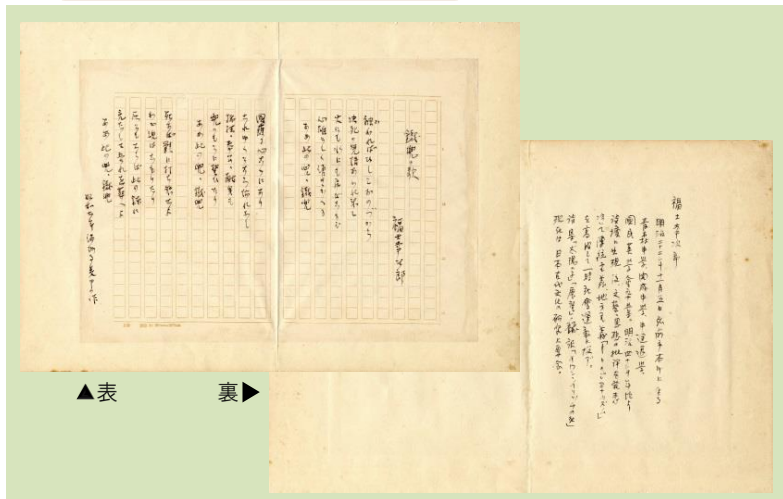


サトウハチロー

新資料紹介

◆ 詩「鉄兜の歌」直筆原稿

A4判400字詰原稿用紙 1枚



▲表 裏▶

昭和7年5月、雑誌『ファッシュズム』第3号に掲載された詩で、『福士幸次郎著作集』には未収録の作品である。裏面には、幸次郎の略歴が直筆で書き込まれている。

文脈ニュース75号では書幅を紹介したが、この度その生原稿が入手できた。企画展が始まったと同時に見つかったことに不思議な巡り合わせを感じる。

弘前市立郷土文学館

ああ此の兜、鐵兜
死なば骸に打ち乗せよ
わが魂はこもりたり

幸次郎の激しい思いが表現されている。

平成28年度 スポット企画展

第1弾

「与謝野寛・晶子の津軽—与謝野寛・晶子の手紙」

期間：平成28年4月20日～5月31日



板柳町で(大正14年9月23日)
写真中央 与謝野晶子・寛

大正14年、与謝野寛・晶子は、十和田湖見学の旅に出ました。その際、親交のあった歌人安田秀次郎に招かれ、板柳町を訪れます。夫妻は、同町の松山鐵三郎氏宅に宿泊。その後も交流を続けました。その当時の手紙が松山家から見つかり、所有者のご厚意により展示することとなりました。手紙は、岩木山の美しさ、りんごや漬物を送ってもらったことへのお礼、安田氏、松山氏の短歌を添削指導、また『明星』復刊への意気込みなどを伝えています。

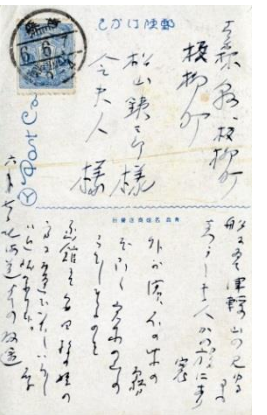
国内初の手紙の公開となったため、訪れた人々は、与謝野寛・晶子の筆跡を興味深く見学していました。

(解説員のつぶやき)

「与謝野寛・晶子の津軽」をスポット企画展に取り上げるって聞いた時は、「あの『明星』の与謝野晶子？青森に、しかも板柳に来たの？」ってびっくりでした。その後も板柳の人々と交流を続け、手紙のやりとりをし、「りんごや津軽塗をいただいた」、などという内容の手紙もあったり、教科書の中の人という印象が強かった与謝野夫妻が身近に感じられるようになりました。板柳では町民を対象とした古典の講義もしたという寛と晶子。どんな講義だったのか、聞いてみたかったなあ！



昭和6年6月7日(絵はがき 青ペン書)
青函連絡船飛鳥丸



「太宰治の高校生活」

期間：平成28年7月1日～9月30日



〔撮影：藤田本太郎〕

太宰治は、高校時代を弘前で過ごしています。入寮が原則でしたが、諸事情により、親戚の藤田家に下宿します。

下宿先の藤田本太郎・昌次郎兄弟たちとも仲良く、本太郎が撮影した様々な表情の太宰の写真や、二人に宛てた書簡が残されています。高校では、自ら創刊した『細胞文芸』や、校友会新聞雑誌部の役員を務めた『校友会雑誌』に次々と作品を発表。活発に文芸活動を行っていました。

藤田家所蔵の愛用した辞書や、写真、津島家からの仕送りの現金封筒などを展示し、太宰治の高校生活を振り返ります。

(解説員のつぶやき)

「太宰治の高校生活」のポスターに使った下宿先での写真ですが、よく見かける太宰の写真とは印象が違わらしく、「ちょっと顔が違わねえ！」というお客様の感想をよくもらいます。太宰だって、弘前の藤田家で過ごした時は、青春真っただ中の高校生。表情の中にあどけなさが残る太宰…。文豪としての太宰とは違った顔を持っている時代ですね。



『校友会雑誌』第15号
弘前高校校友会新聞雑誌部

弘前市立郷土文学館